

1999 年度第 2 回研究集会報告

平成 11 年 11 月 21 日、1999 年度第 2 回バレーボール研究集会在福岡大学セミナーハウスにて行われた。

25 点ラリーポイント制は、バレーボールの試合時間の短縮と得点形式のわかり易さを理由に、今年度から正式に採用されたルールであるが、現場で大きな波紋を呼んだルール改正である。バレーボールがどのように変わるのか、実際の試合ではどのように戦えばいいのか、暗中模索の中、多くの指導者やプレーヤーが試行錯誤しているのが現状であろう。

「階段を一步踏み外してとどまると相手は先に行ってしまう。そんなラリーポイントをどうとらえていくか、招いた 4 名のシンポジストの方々に、話題を提供していただき考えていきたい。」という朽堀申二会長の挨拶に引き続き、高校（ユース）女子、実業団女子、高校（ユース）男子、ナショナルレベルの各立場から、25 点ラリーポイント制での戦い方についての講演が行われた。（総務委員 後藤浩史）

「高校女子の指導から」

松本 幸氏

今年の世界ユースの記録をもとに、ユース女子チームの戦い方を振り返っての説明がなされた。

今年のチームは、サーブ、サーブレシーブからの切り返しでの得点能力に優れていた。ユースのブロックは、記録的には下から 2, 3 番目であった。ブロック本数自体は少ないが、ディフェンスとしては効率のよいブロックで、レシーブの助けとなっていたように感じる。レシーブからの切り返しで、こつこつと点を重ね、接戦であったが何とか勝ち抜いていった。

特にラリーポイント制におけるサーブの工夫に関して、なによりもサーブに対して工夫させるようにした。8 秒ある時間をうまく使い分けるようにさせ、あわてて打ってしまう傾向のある選手、長いサーブを打つ選手は、十分に時間をとって待って打たせる。また、エンドラインぎりぎりから打つ選手は早く打たせるなどの工夫である。また、ここで一点欲しいときの勝負球を持たせることも必要であろう。いつも勝負サーブを打つというわけではなく、ふつうの流れの時には、相手の嫌がる場所、密集しているところなど、データに基づいて、狙いどころを間違わないようにさせた。

また、ピンチサーバーの使い時に関して、15 点から 17 点の時点での使い時が難しい。ここが勝負どころなのか、もう一周回るのか等、次の機会を待つのかどうかの判断ができることが必要だと考えている。2 人のピンチサーバーの使い分けも、ゲームの半ば、終盤と分けて使うのか、半ばに勝負どころだと考えて、2 人とも使ってしまうのか、状況に応じて判断している。ラリーポイント制における試合の流れを読むことが重要である。

さらに、試合に臨む選手の気持ちのもっていきかたに関しては、「勝つぞ」ではなく、「負けるわけにはいかんだろ」という気持ちが大切だと考えている。また、特にラリーポイントではゲームのスタートを気分良くはじめさせたい。さらに、1 点の大きさに対する配慮も必要であろう。

「実業団女子の指導から」

浜田 勝彦氏

9 人制での経験もふまえて、ラリーポイント制に対する考え方や、現在行われているワールドカップにおける現状などについて説明された。

【戦術】25 点ラリーポイント制では、20 点までに 3 点離してしまえば、有利なのはたしかである。しかしながら、仮に 7-0, 8-0 のスタートになったとしても、そのまま 25-17 で終わるのかといえば、そうでもない。15 点頃には 3 点差ぐらいには追いつくことが多い。逆に離れている差がつかると、勝っていても負けているような気になる。これがラリーポイントの醍醐味でもある。勝負所は 15 点前後に 1 回、20~23 点までに 1 回ある。

点数をとられるのは当たり前。1 点とられたら 1 点とればいいという考え方がラリーポイントの考え方である。どこで 2 点差にできるか、するかがポイントになる。

【サーブ】サーブから始めるのか、サーブレシーブから始めるのか。サーブに自信があれば、サーブから始めるのも一つの戦略である。

サーブは場面によって使い分ける必要があるが、チャンスボールでは勝負にならない。日本のサーブは、他の諸外国に比べると確実にレベルが落ちる。世界レベルでは、セッターに返れば 80% 決まると思う。そういう状況で、チャンスボールを打っていたのでは勝てない。また、勝っているときのデータ、負けているときのデータでは違う。勝負どころのツメを間違わないようにしなければならぬ。さらにラリーポイントでの 5 セットマッチでは、捨てセットを作るのも戦略であると思う。

【レシーブ】レシーブに関して、考え方を見直す必要がある。ラリーポイントという流れの中でのレシーブなので、受け身ではラリーをとれない。シフトに頼りすぎて、待っているのではなく、自分の読みと判断で取りに行くレシーブが必要。ワールドカップを観戦していて感心したのは、韓国のリベロで、いつもスパイクの打たれるところにいる印象がある。レシーブはそのぐらいの気持ちでやって欲しい。

「ラリーポイント制で勝つにはどうしたらよいか？」

濱田 幸二氏

【はじめに】 1999年4月にアジアユース選手権、9月に世界ユース選手権大会が行われた。今回はアジア選手権から25点ラリーポイント制が導入されることが決まっております、事前合宿からスタッフ一同、今回のテーマ「25点ラリーポイント制をどう戦うか？」ミーティングを繰り返した。そこで、9月に行われた世界ユース男子選手権大会の、日本チームの戦い方を分析し話題を提供したいと思う。最初に、試合内容を分かり易くするために、ラリーポイント制での得点をサイドアウト制にし、平均してサイドアウト制で9点前後の勝負「短期集中決戦方式」と判断した。表1ベネズエラ戦の結果を、ラリーポイント制の得点を試合の経過をおって、サイドアウト制に換算したものです。ここで注目したいのが、4セット目です。ラリーポイント制では全て2点差をつけられて日本が負けているが、サイドアウト制では1点差しかついていない。何故その様なことが起きるか、図1のBチームはレシーブから始まり1回の連続得点(サーブ権がある時にポイントする)で、ラリーポイント制

では2点差をつけてセットを取っている(しかし、サイドアウト制にすると1点差ということになります)。しかし、どのセットもサイドアウトで1点入り、25点というゴールにどんどん近づく。これまではサイドアウトを取ることは、「負けないバレー」が、確実に「サイドアウトを取ること」がより勝つバレーにつながるわけです。今回のユースチームは、サイドアウトを取るためにセッターを中心としたコンビ攻撃で得点を重ね、連続得点の仕掛けの主流はブロックにし、はじめから止めにいくコミットブロックを採用し大会に望んだ。そこで得点の半数以上を占めるサイドアウト得点について、特にサーブレシーブからの1回目のスパイク攻撃について、以下のように世界ユース選手権のデータを分析してみた。

【分析方法】 トスを4種類(1.クイック 2.時間差 3.オープン 4.バックスパイク)、そのスパイク攻撃の結果を4種類(1.決定 2.有効 3.継続 4.ミス)に分類し、対戦相手別に出し考察した。

【結果及び考察】 図2はベネズエラ(スーパーエース型)戦のサーブレシーブからの攻撃を比較したものです。ベネズエラは一人スーパーエースがいて、全体的によくジャンプしまとまりのあるチームである。日本はサーブレシーブが乱れたときレフトがブロックされ、決定力に欠けた。逆にベネズエラは、圧倒的(どんな状況でも)にスーパーエースにトスを持っていき、確実にポイントするというパターンで得点を重ね、終盤日本のブロックのマークがスーパーエースにいくと、クイックや時間差を使い、日本は競り負けた。日本の勝敗セット比較(図3)ですが、目立つのがバックスパイク攻撃のミスが負けた試合が多く、これは前衛2枚攻撃の時に、バックスパイクに頼りすぎてミスを連発し連続失点し負けたということが考えられる。

【まとめ】 サーブレシーブからの攻撃で、コンビを使って確実に点数を取り2点差をつけてセットを取ることが重要であるが、レシーブが乱れたときに決定力(いわゆる二段トスやオープントスを打ち切る)のあるスパイカーがいないと勝利することが困難であると考えられた。今大会で優勝

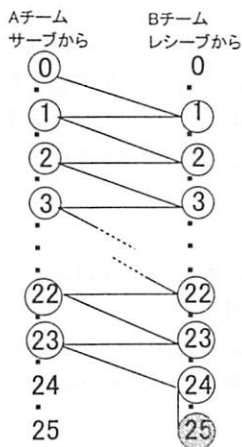


表1 予選グループ 第1戦
JPN ● 2-3 ○ VEN

	SO制	RP制	SO制
1 SET	12	25- * 16	3
2 SET	6	* 20- 25	11
3 SET	13	25- * 15	4
4 SET	7	* 25- 27	8
5 SET	2	9- * 15	8

図1 レシーブから始まり2点差をつけてセットを取るパターン(1回の仕掛け)

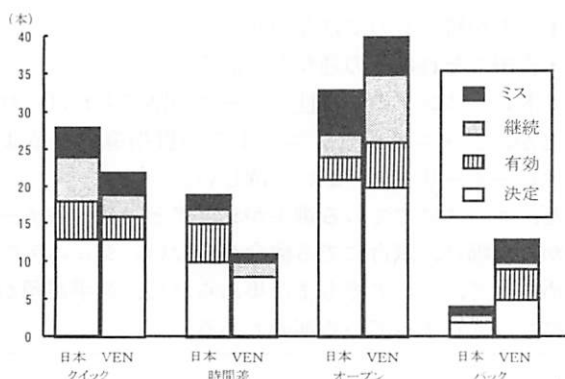


図2 日本対VEN サーブレシーブからの攻撃

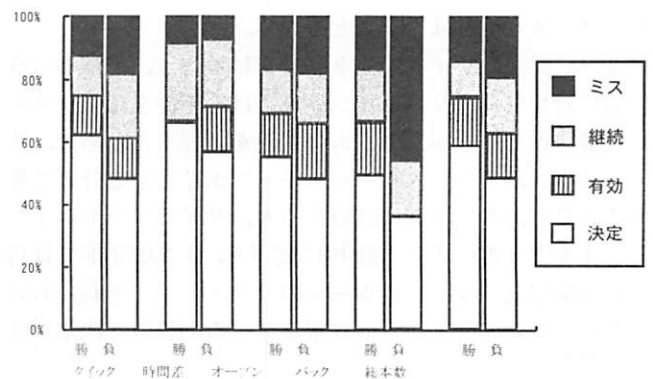


図3 日本勝負セット比較 サーブレシーブからの攻撃

したロシアは、平均身長 2m 強でセッターを中心としたコンビバレーをし、しかもサーブとブロックで仕掛けることが出来るチームであった。今後決定力のあるサイドスパイカーの養成と、コンビバレー（サーブレシーブからの攻撃で確実に 1 点取る）をするための時間が必要であると考えられた。

「25 点ラリーポイント制ゲームのシミュレーション」

吉田 清司氏

昨年の世界選手権（15 点サイドアウト制）からのシュミレートと、今回のワールドカップにおける実際のデータより、セットの勝敗でみると、60 セット中 13 セット（21.67%）で逆転が起こっていた。日本に限定すると、34 セット中 10 セットで逆転（勝ちに転じたセット 6、負けに転じたセット 4）が起こる。日本は当時の世界ランキングで上位のキューバやブラジルからセットを奪うケースもあったが、逆に下位のエジプトにセットを落とす結果もあった。

先日終了したワールドカップ女子の試合結果では、番狂わせといえる結果はなかった。ただし、キューバが下位チームにセットを落とすように、下位チームがセットを取るケースは増えた。

サイドアウト制からラリーポイント制に移行して、チーム同士の力関係が変わる可能性は少ない。セットとしては逆転が起きる可能性はあるが、5 セットマッチで考えた場合、ゲームの逆転が起こる可能性は高くはないと感じる。

昨年の世界選手権（サイドアウト制）の結果からは、ラリーポイントになった場合、プレー回数 48.29 回（54.66%）、試合時間 18 分 20 秒（56.75%）、勝ち得点 8.65 点（57.17%）、負け得点 5.27 点（53.61%）と、サイドアウト制の約 55% となることが予測されたが、現在行われているワールドカップでの集計結果では、シュミレートした結果よりも、時間は長く（22 分 45 秒）、ラリー回数は少ない（45.3 回）傾向にある。新ルール導入によって、これまで 15-10 で決着がつけられていたゲームが、9-5 の時点で終了する目安である。チームにとっては、これまでよりもスピードアップした試合展開が要求される。また、サーブが弱くなるという予想があったが、関係なくジャンプサーブで勝負してくる。サーブミスもそれほど気にとめない。

また、従来のサイドアウト制における得点、得権という区別に対して、ラリーポイント制では、その全てのラリーが直接得点となるが、ゲームの状況を把握するために、サイドアウトポイント、サービスキープポイントと分けて考える必要がある。単純に計算すると、サイドアウトポイントを 4 本中 3 本にすると勝利に近づき、3 本中 2 本では負ける確率が高くなる。新ルールのラリーポイント制においてもサーブレシーブからの攻撃がゲームの勝敗を決定する

上で重要である。

サービスキープポイントに関しては、平均の総計 8.6 点のうち、その内訳は、サービスポイント 2.07 点、ブロックポイント 1.28 点、アタックポイント 2.82 点、ミスポイント 2.43 点であり、国際レベルの試合では、この前後の数字が得セットの目安となりうる。

特にサービスポイントに関して、諸外国は日本と比較して積極的にサービスポイントを獲得している。近年、諸外国のサーブはジャンピングサーブが主流をなし、ミスを恐れずに直接ポイントを狙う強力なサーブが多い。その傾向はラリーポイント制になっても変わっていないように感じる。日本は体格的なハンディとともに、チームの得点プランにおけるサーブの位置づけが低く、サービスポイントが低率になっていると推察される。新ルールで、サーブ側がサービスキープできる確率は 25% 前後と予想されるが、高い確率でミスをするようなサーブでも、サービスキープできる確率を 40% まで上げることができれば、サーブで攻めの姿勢を崩さないことは悪い選択とは言いきれないだろう。新ルールによってサーブの傾向がどのように変化するかは、ゲームを左右する大きな要因として今後も検証していく必要がある。今大会の好調のアメリカは全員ジャンプサーブを打ってきた。

日本が勝利するためには、日本の勝ちセットの特性である、高いサイドアウト率の維持と、ブロックを中心とした粘り強い展開で、相手ミスを誘うようなゲームプランを目標に、トレーニングを積んで行く必要性が示唆された。

【質疑応答より抜粋】

Q：ラリーポイント制に変わって、変わった練習法

松本：サーブをかなり意識した練習

あきらめているように見えるプレーに関して、見過ごしても点にならないようなプレーに関しても、細かいところまで、時間をかけるようになった。

松本：攻めの雰囲気。サーブは武器なんだという意識。場合によってはサーブからスタートすることも一つの方法

Q：ユースでは高さを求めるよりも中型のしっかりした選手の方が勝てるのではないか。

濱田・吉田：それはその通りだと思う。

松本：トレーニングの一貫性。ユース段階であればこれぐらいとか、ジュニアからシニアまで一貫指導できるように、トレーナーリーダーがいて欲しい。

また、ユースにでている選手がシニアと一緒に各チームに分かれた場合、試合にでる機会が少ない。ジュニアでまた集められて、シニアでもまた集められて、選手が預かりものになってしまっている部分もある。